

30年以上続いた開発独裁政権の始まりと終わりという歴史のうねりが名もなき個人にもたらしたはずの、どこにも記録されず、語られることもない記憶や喜怒哀楽の一つ一つを、映画はフィクションという形で紡ぎ出す。そのような無数の物語から織り上げられるテキストがそれぞれの記憶や思いを託して観る人びとと共鳴するときに、インドネシアをめぐる「まだ見ぬ夢」のビジョンは生み出される。著者はそのビジョンを克明に読み解き、入念な脚注で補いながら、ひとりでも多くの読者に届くよう言葉を尽くしているのである。

著者はその著書『災害復興で内戦を乗り越える——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（2014年、京都大学学術出版会）に記されているように、アチェをフィールドとする地域研究者として、その地が紛争で二重三重に傷つき、続く災害から和解へと導かれるまでの痛みの現場に立ち会い、人びとの肉声を聞いてきた。中央政府と和解する以前のアチェで、独立派の青年が著者に、インドネシア側の国民的シンガー、イワン・ファルス之歌を弾き語って聴かせたという本書あとがきに記されたエピソードに示されているように、ねじれやもつれ、亀裂や矛盾を含みながら個人が抱く夢やその残骸までもが、歴史をつくる推進力でありうることを著者は身をもって知っている。だからこそ映画というテキストが語ろうとする「声」を受け止めることができるのだ。本書に紹介された一つ一つの映画と、それらが語る「夢」に耳を傾ける著者とのあいだに共有されてきた、時間と空間の集積を思わずにはいられない。

その一方で、著者も言及しているように、民主化から四半世紀が過ぎてコロナ禍も経たず、インドネシアでも映画とその観られ方は著しく変容している。映画視聴の場は映画館から再生機を利用したテレビやパソコンに、そしてスマートフォンへと移りつつある。さらには一つの映画をあらゆる短縮したファスト映画が流行し、映画をそこにまだない何かを想像し語り合うためのものとしてではなく、他のコンテンツと同様に、すでにある情報として「消費」すべきものとみなす世代が

台頭している。そうした意識の現れか、閉塞しているがとりあえず安定している現状を追認する、あるいはまるで、「夢」など誰も見なかったことにするような映画も登場した。近年、昨今の90年代カルチャーブームにのってつくられた青春映画『ディラン1990』（2018）シリーズは、東ティモールの掃討作戦で功績を挙げた国軍幹部の父を持つ少年ディランと、同じく国軍幹部を父に持つ少女が、双方の親たちに祝福されつつ愛をはぐくんだ（民主化前の）90年代初頭を、現在は成人となり別々の暮らしを持つ彼ら彼女らの追憶としてひたすらノスタルジックに描いている。そこには夢や未来はなく、同じく高校生男女の恋物語で本書にも取り上げられる『ビューティフル・デイズ』（2001）の主人公たちが、「父」亡きあとに関係を成就したのはあまりにも対照的である。それでも『ディラン』シリーズが前代未聞のヒットを記録し、劇場ばなれを起こし始めたZ世代の若者たちをふたたび銀幕へと向かわせた出来事を私たちはどう読むべきなのだろうか。「夢」は避けられているのか。それとも夢と呼ばれるものの意味が変わりつつあるのか。それもまた、「同時代を生きる我々すべてに投げかけられている問い」なのかもしれない。

（竹下 愛・東京外国語大学非常勤講師）

参考文献

- 西 芳実. 2014. 『災害復興で内戦を乗り越える——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』 京都：京都大学学術出版会.

津田浩司. 『日本軍政下ジャワの華僑社会——『共栄報』にみる統制と動員』 風響社, 2023, 780p.

本書は、日本軍政期（1942～45年）のインドネシア（旧蘭領東インド、蘭印）とりわけジャワ地域に定住していた約70万人の中国系住民（以下、当時の呼称に従った本書の語法に倣い華僑と総称）に対する軍政府の諸政策と華僑側の対応、ひいては当時の華僑社会の実態を詳細に明らかにした、全780頁の大著である。

従来、この時期の華僑に関する知見は、インドネシア華僑研究の側からも日本軍政研究の側からもほとんど空白に近かった。本書でそれを埋めることが可能になったのは、軍政下で華僑の手によって華僑向けに発行されていた唯一の新聞『共栄報』（華語版とマレー語版）の原版を著者自らインドネシア国立図書館で発掘し、利用可能な形にして復刻出版していたからである〔津田 2019〕。それ自体史料価値のきわめて高い『共栄報』全32巻（いずれも日刊で華語版通算1058号、マレー語版（Kung Yung Pao）通算932号、さらに華語版の前身『新新報』全14号、マレー語版の前身『洪報（Hong Po）』190号までを含む）を著者自身が改めて読破し、基礎資料とすることによって本書が成った。

本書は「はじめに」及び序章と終章及び「あとがき」並びに索引等（これらも重要かつ読み応えがある）に挟まれた、本体I～IV部・全12章から成る。

第I部は「資料としての『共栄報』」と題し、軍政のプロパガンダ紙としての側面をもつ同紙を基礎資料として用いる上で踏まえるべき事柄を周到に検討する。第1章で蘭印時代からの華僑ジャーナリズムの系譜における『共栄報』の位置を確認した後、第2章では他の華僑系新聞・雑誌が全て停刊とされた軍政期、独り『共栄報』のみが刊行された経緯や編集体制の推移・人員の顔ぶれなどを分析する。第3章は『共栄報』のメディアとしての特徴を使用言語や紙面構成などの面から検討する。この第I部はいわば準備作業としての史料批判なのであるが、ここまでで既に158頁（本文約12万字、註約8万5千字、計20万字強。ちなみに本書全体では本文に註を加え総計約100万字）を費やしている。

第II部「日本軍政の開始と華僑社会の混乱」は、日本軍が蘭印全土を制圧しジャワにおいて第十六軍による軍政が始まった1942年3月から約半年間に華僑社会が直面した課題とそれへの対応ぶりを描く。第4章では、日本軍上陸直後の権力空白時に生じた現地住民による略奪行為によって難民化した華僑の救済のため、ジャワ各都市で後の華僑総会にもつながってくる諸組織が立ち上げられ活動を開始した経緯が描かれる。第5章では、日本軍政当局から潜在的な「敵性外国人」とみなされ

た華僑が、出生地等の多様性に拘らず一元的に強制された外国人居住登録制度と、それに伴う法外な登録料納付の要求に、各地の華僑社会指導層が貧困者への善処などを当局にかけあいつつ、必死に対応したさまが描かれる。同時に、難民救済とあわせた喫緊の対応を通じ、各地の華僑社会が文字通り華僑社会として凝集していったという重要な指摘がなされる。第6章は、日本軍政による最初の大規模な住民動員運動である「3A運動」（アジアの光・日本、アジアの母体・日本、アジアの指導者・日本、というスローガンの普及運動）に華僑社会がどう対応・協力したかが描かれる。ほぼ同時期に旧来の華僑指導者のうち親オランダもしくは抗日運動リーダーなどとみなされた人々が一斉に逮捕・拘禁され、それまで華僑社会で最も影響力をもっていた中華総商會が解散に追い込まれる中、首都バタヴィア（1942年12月にジャカルタと改称）の黄長水をはじめ日本軍政期に華僑社会を代表する人士が台頭したこと、華僑にとってはインドネシア人（蘭印時代の「原住民」）、アラブ人、インド人などと協力する枠組みが初めて与えられた点で重要な意味をもっていたことなどが指摘される。

第III部「華僑総会の成立と展開」は、軍政開始の半年後から各地で発足し始めた華僑総会（史上初の華僑社会の統一組織）の設立経緯や組織の内実、その活動の展開過程を追う。第7章では、首都の華僑総会の準備組織として1942年9月に発足したバタヴィア華僑総会籌備委員会の編成過程と活動内容を分析する。第8章では、日本軍の上陸後閉鎖されていた華僑学校が、華僑総会（初期にはその前身組織たる籌備委員会など）を通じた統制のもとで再開・展開した過程と各校の教育実態について精緻な分析がなされる。蘭印期に華僑（特に現地生まれのプラナカン）の半数近くが就学していたオランダ語系の学校や教育が禁止され、中国語による教育を基本とする方向が採られたため、華僑の華僑化（中国化）が進んだこと、マレー語（インドネシア語）教育が進展した「原住民」との間にいわゆる「複合社会」的な断裂状況がいつそう強められたことなどが指摘される。第9章は、華僑総会の設立が、3A運動に替わる軍政協力運動

プートラ(3A運動と異なり、専ら原住民を対象とした)の設立と並行する施策であったことを明らかにした上で、華僑総会を通じ、華僑の生活現場でいかに人々の統制と経済資源の動員がなされていたかを、飛行機献納運動や貯金奨励運動、宝石収集運動などの具体例ごとに追究する。

第IV部「強まりゆく統制・動員の諸相」では、軍政期後半から終盤にかけての華僑社会の動向を、ますます厳しくなってゆく軍政当局の諸施策とそれへの対応の過程として分析する。第10章は、1943年2月に突如導入され華僑に課された移住・旅行取締令の導入と撤廃の経緯と背景を、これに関係する可能性のある諸事象(地下抗日運動の発覚、華僑を現地政治へ参与せしめる施策など)の真相と共に検証する。第11章は、1944年頭に「全ジャワ住民を打って一丸とする新住民奉仕組織」=ジャワ奉公会を設立することが告知されるとほぼ同時に、軍政の末端組織として確立すべきことが謳われた隣保組織=字(あざ)常会・隣組制度の導入の過程と華僑社会にもたらしたそのインパクトを分析する。第12章では、1944年後半以降、日本にとっての戦局の悪化に伴い、華僑の警防組織が(原住民の組織とは別建てで)立ち上げられていった過程を追い、非常に情報の錯綜した諸組織の関係や実態の解明を試みる。

終章は、日本の降伏前後の状況、軍政期の主な関係者たちの「その後」の概況を記すと共に、『共栄報』から見えること/見えないこと」を改めて整理し、考察を終える。

本書の貢献点は何より、インドネシアの華僑研究・日本軍政期研究の双方で体系的知見の欠けていた軍政期の華僑をめぐる状況について、日本側の政策の推移とその狙い、華僑側の対応(時に両者の応酬)と帰結、さらには当時の華僑社会の実態(特に種々の組織・団体・学校などの消長を中心とする社会生活の諸相)を、世界的にも初めて詳細に明らかにしたことである。軍政が企図した華僑の統制と動員に関わる大きな枠組みから華僑側の諸組織・個々人の細かな動向まで、各章とも無数の発見に満ちており刺激的である。単に分量が多いだけでなく、手堅く高質な記述で全編が貫かれている。

貢献点の二つ目は、史資料の活かし方を新たに開拓したことだろう。旧来の華僑新聞が全面禁止された中、『共栄報』が日本軍政の意図を伝えるためのプロパガンダ紙という側面をもつことは、所与の条件である。プロパガンダ紙だから使えない、とはなから無視するのは「思考停止」だと著者は言う。前述の通り第I部を丸々費やすほどの周到な史料批判を施し『共栄報』の特性をつかんだ上で、全体のコンテクストから行間の意味を読み取る、また当局の官報や当該の事柄に関わった華僑・日本人当事者の手記・回顧録をはじめとする他の様々な資料と突き合わせて「ウラをとる」など細心の証拠固めや照合・推理を重ねれば、たとえ軍の検閲が入っていても、当時の社会の実情を生き生きと再現する上で驚くほど豊かな情報源とすることが可能だ、ということを今回(自ら復刻もした)『共栄報』を一つの例として実証してみせた意義は大きい。

資料とも関わる方法論に関して言うと、最終的な叙述は実証史学の体裁をとっているが、著者の本来の専門である文化人類学の考え方や、ジャワにおける二十数年来の実地調査で培われたのであろう現場感覚がそこかしこに活かしている。少なくともジャカルタについては、当時日本側・華僑側の諸組織の拠点に使われた建物の跡地や(蘭領期、日本軍政期、独立期と名称の変遷した)通りなどをくまなく歩き、それらの現況や互いの地理的關係を確認し直している。おそらく執筆中の著者の頭の中には、現在のジャカルタに重ねて約80年前のパタヴィアの街並みや行き交う人々の姿までまざまざと浮かび上がっていたことだろう。その「空気感」は本書を読む読者にも伝わってくる。そうした舞台の上で、名前を同定されただけでも1,000人近い(華僑のみならず他のインドネシア人や軍政に関わった日本人を含む)人々が、先行き不透明な戦時下、各々の職務や信念や思惑のもと複雑に絡み合いながら展開した、緊張感あふれる人間ドキュメントに仕上がっている。

もう一つ特筆すべきは巻末資料の充実ぶりであろう。特に索引は、①全60頁を費やし、②人名、地名、主に日本側の諸組織、主に華僑側の諸団体、学校・教育関連機関、事項、新聞・資料や刊行物、

法令などの8カテゴリーに分け、③本文のみならず膨大な註からも余さず拾っている。学術書は単に読むものでなく、他の／後続の研究者が「使う」ものだということを踏まえた、非常に親切な作りである。著者の要望であったろうが、それに応えた出版社にも敬意を表したい。

最後に著者の今後の研究に向けた注文を一つ記しておく。本書の序章で著者は、この書の課題を「……日本軍政期を通じて彼ら（華僑）に対しどのような施策が展開され、……華僑社会の側はどのようにそれに応じていったのかを、微細に描き出すこと」（p.55）だとする。そして『『微細に』』とここであえて述べたのは、そうすることこそが、いわゆる『大きな物語』に回収されるのを避け、可能な限り同時代の人々の経験に接近する方法だと信じるからである」と言う。著者いわく「ここで遠ざけたい『大きな物語』とは、主要にはふたつある。ひとつは、いわゆるナショナリズムの物語であり、もうひとつは、当時の日本軍政のプロパガンダが見せようとした絵に基づく物語である」。¹⁾

ナショナリズムや日本の戦争スローガンに代表されるイデオロギーを基準に人々の言動を安直に価値判断するのではなく、人々や組織がどのような状況で何を言い何をしたのか、その事実自体をコンテクストに即して「微細に」明らかにするという著者の姿勢は本書を通じて徹底しており、それを目指すと宣言した課題は十二分に達成されている。

だが、本書においては、ナショナリズムや戦争をはじめとする「大きな物語」は著者が追及し描き出す膨大な事実の「前提」ないし「背景」としてのみ扱われている点が、評者にはいささか不満なのである。²⁾ ある時代・地域の社会やそこに生き死にする人々の生活も喜怒哀楽も、それらを翻弄する「大きな物語」の分析抜きには究明し切れないのではないだろうか。グランド・ナラティブを

語らない、というのはここ数十年の学界の流行りでもあり無難な姿勢でもあろう（むろん本書をなすまでの著者の苦心を否定するものではない）が、本作以降の著者にはそこに安住して頂きたくない。³⁾ 人類史の「大きな物語」は21世紀にも終わらないであろうし、歴史叙述は大から小まで自分なりの物語を紡ぐことなしには成立しない。今後はぜひ「大きな物語」自体の生成・普及・影響のありさまを「微細に」分析し描くことにも挑んでほしい、というのが評者の希望である。

（貞好康志・神戸大学大学院国際文化学研究所）

言及・参考文献

- リオタール, ジャン=フランソワ. 1989. 『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』 小林康夫 (訳). 東京: 水声社. (原著 Lyotard, Jean François. 1979. *La condition postmoderne: Rapport sur le savoir*. Paris: Éditions de Minuit.)
- 津田浩司. 2011. 『『華人性』の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから』 京都: 世界思想社.
- . 2017. 『『歴史をまっすぐに正す』ことを求めて——国家英雄制度をとおした、ある歴史家の挑戦』 『『国家英雄』が映すインドネシア』, 山口裕子; 金子正徳; 津田浩司 (編), 213–260 ページ所収. 松本: 木犀社.
- . (監修・解題). 2019. 『復刻 共栄報 1942～1945』 台北: 漢珍數位圖書; 東京: ゆまに書房.

||| 櫻田智恵. 『国王奉迎のタイ現代史——プーミポンの行幸とその映画』 ミネルヴァ書房, 2023, vii+323+20p. |||

プーミポン国王の地方行幸が「国王神話」の形成に大きな役割を果たしたことは広く知られている。しかしどの時期にどのような行幸を行ったのかを一次資料にあたって詳細に調べ上げ、その意

1) このように、著者がいう「大きな物語」とは、この語の提唱者であるリオタールの元々の用法（科学が自らの正当性を担保するための哲学）とはかなり異なる [リオタール 1989]。
2) 個人や社会の実態を「大きな物語」に回収せず、「微細に」描くというのは、実はデビュー作 [津田 2011] 以来の著者の基本姿勢であり真骨頂でもある。おそらく本書はその到達点であろう。

3) 津田 [2017] は、インドネシアの「国家英雄」の指定・顕彰制度を題材に、ナショナリズムと歴史叙述をめぐる諸問題に小稿ながら鋭く切り込んでいる。